

縄文人の共生の精神に学ぶ

縄文シティサミット開く

縄 文人の精神文化から学び、それをこれからのまちづくりにつなげようと縄文遺跡をもつ自治体が集まり、縄文シティサミットinとうや湖（主催：縄文シティサミットinとうや湖実行委員会・縄文都市連絡協議会）が7月3日、4日の両日洞爺湖文化センターで開かれました。「心・人と自然との共生・縄文人の精神文化に学ぶ」をテーマに、各自治体の首長や町民など延べ約800人が参加し、講演や活発な意見交換が行われました。

初日は、木村利正実行委員長が「このサミットを、縄文人の心を学ぶ機会にしたい」と歓迎の挨拶を行い、フラワービーンズの合唱と洞爺湖音頭保存会による洞爺湖音頭がオープニングを飾りました。

サミットでは、縄文遺跡を持つ当町他道内4市町が世界遺産への取組みとして、活動報告を行いました。

引き続き基調講演に移り安田喜憲日本文化研究センター教授が「地球への祈りと縄文文化」と題して講演。安田氏は「縄文時代は、今までの環太平洋で生まれた破壊する文明でなく、共生する文明である」と説き、その精神を「地球の生きとし生けるものの命をつなぐ考え方である」と強く主張しました。



安田喜憲日本文化研究センター教授



縄文シティサミット宣言を朗読する長崎町長

小林名誉教授は「アイヌ文化のルーツとして縄文文化がある」と語り、それを引き継いで本田教授がアイヌ社会の原点として「人にものを与えることを惜しむ心は最高に恥ずべきことである」との考えを紹介し、縄文人との共通性を「その精神のありようにある」ことを述べました。

縄文都市連絡協議会加盟の首長らの意見交換では、縄文遺跡をまちづくりや観光振興にどう結びつけていっているのか、各地域での具体的な取組みが語ら



意見交換での各自治体の首長

縄文シティサミット オープニングセレモニー

6月27日、「縄文シティサミットin洞爺湖」（主催：同実行委員会等）の開催を告げるオープニングセレモニーが、入江・高砂貝塚館前で行われ、町民や関係者約100人が参加して開催を祝いました。

当日は、発掘された土偶をモチーフに、町民の寄付で作られた御影石製のモニュメントの除幕式と不審火に遭い復元した竪穴住居も公開されました。



モニュメントの除幕式

最後に長崎町長が「縄文シティサミット宣言」を朗読し、2日間のサミットに幕が降ろされました。

会場の外では、地元の縄文サークル「アプタフレイナイの会」の会員により、地場の魚介類が盛りだくさんの縄文鍋が振舞われ、サミット成功に一役かかっていました。



虹小での贈呈式

れました。

**ウェブсайт製作会社
縄文関係の本寄贈**

幌市のウェブсайт製作会社インテリジェントリンク（森影依社長）が、縄文シティサミットを前に、子どもらに縄文文化に興味を持ってもらいたいと縄文関係の書籍30冊を町内の8小中学校に寄贈しました。

6月30日には虹田小学校を訪れ、児童会長の山崎夏希さんに直接本を手渡しました。